〈社会科〉

思考力を高める学習指導の工夫

～資料を読み取る活動を通して～

宜野湾市立宜野湾中学校教諭　　前　幸三

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 ---------- 57
Ⅱ　研究目標 ---------- 57
Ⅲ　研究仮説 ---------- 57
Ⅳ　研究の全体構想図 ---------- 58
Ⅴ　研究内容 ---------- 59
1．新学習指導における考え方（多面的・多角的な思考） ---------- 59
2．多面的・多角的な思考とは ---------- 59
3．社会科学習と資料 ---------- 59
(1)教材と資料 ---------- 59
(2)資料と社会的判断力 ---------- 60
4．集団における思考力の指導 ---------- 60
(1)思考と集団　　(2)集団思考の条件 ---------- 60
5．思考のメカニズムを探る ---------- 61
(1)考え方の「手がかり」とは ---------- 61
(2)「手がかり」をもとにした指導の留意点 ---------- 62
6．仮説（～だはず） ---------- 62
Ⅵ　授業実践 ---------- 63
1．大項目　　2．中項目　　3．中項目の目標 ---------- 63
4．単元について ---------- 63
(1)教材観　　(2)生徒観 ---------- 63
(3)指導観 ---------- 64
5．指導計画および評価計画 ---------- 64
6．本時の学習 ---------- 65
(1)単元名　(2) 本時のねらい　(3)授業仮説　(4)本時の展開 ---------- 65
(5)本時の配布資料①・② ---------- 67
(6)授業での子どもたちの様子 ---------- 69
(7)仮説を立てて学習する流れ ---------- 70
(8)評価 ---------- 71
7．検証授業研究会 ---------- 71
8．仮説の検証１・２・３ ---------- 73
Ⅶ　研究の成果と今後の課題 ---------- 76
〈主な引用文献・参考文献〉 ---------- 76

＜社会＞

思考力を高める指導の工夫

―資料を読み取る活動を通して-

宜野湾市立宜野湾中学校教諭　　前　幸三

Ⅰ.テーマ設定の理由

現代の社会は国際化，情報化など，めまぐるしく加速度的に変化している。ますます激しい変化が予想される社会を主体的・創造的に生きるには自ら考え判断し行動できる資質や能力を身につけることが求められる。そこで、学校の教育活動として児童生徒にこの変化のはげしい社会を生き抜くための「生きる力」をはぐくむ取り組みをめざし平成１０年に「学習指導要領」が改訂された。それを受けて各分野や領域で「生きる力」の育成を目指した教育活動が取り組まれていくこととなる。

社会科としては,「社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」という文言が新たに付加された。つまり，これまでの事実認識の結果を覚えがちだった学習の方法を改め、これからは子どもが自ら学び、自ら考えて結果を導き出すといった学習の過程を重視する授業の取り組みが求められる。

わたし自身のこれまでの授業でも，資料の内容についての受け止め方や個人の考え方など思考力を問うような発問には反応が少なく、その一方で事実認識を問う一問一答的な問題では，発表が増えるといった傾向があったことから同様に結果を覚えさせがちな授業から子どもに考えさせる授業への改善が求められる。

「生きる力」を思考の面から捉えると，物事を多面的・多角的に見ることでその本質を見極め，それが問題であれば解決策を探ること，また，利点であればその有効活用を図る力であると考える。ここでは，物事の本質を捉えるために資料を読み取り，多面的・多角的に物事を見ていく思考力を高めることを目標とする。

そこで，本研究では資料を読み取り考える場面において，学び合う学習形態の工夫や何をもとに考えたかという「手がかり」に注目させることや子ども自ら問題に対する仮説を立てさせその仮説をもとに学習を進めていく活動によって，多面的・多角的に物事をみていくようになり本質を捉える思考力が高められていくのではないか考えこのテーマを設定した。

Ⅱ.研究目標

資料を読み取り考える場面で，学び合う学習形態の工夫や考え方に焦点化した学習指導をすることで思考力を高めていく。

Ⅲ.研究仮説

(基本仮説)

資料の読み取りをする場面において，ブレーンストーミングや KJ 法を用いた学び合いや考えのもととなった「手がかり」をたどる活動や仮説を立て検証していく活動をすることによって，思考が情報量により変化し多様化することや深まることを経験し，多面的・多角的に思考する態度が育成されるであろう。

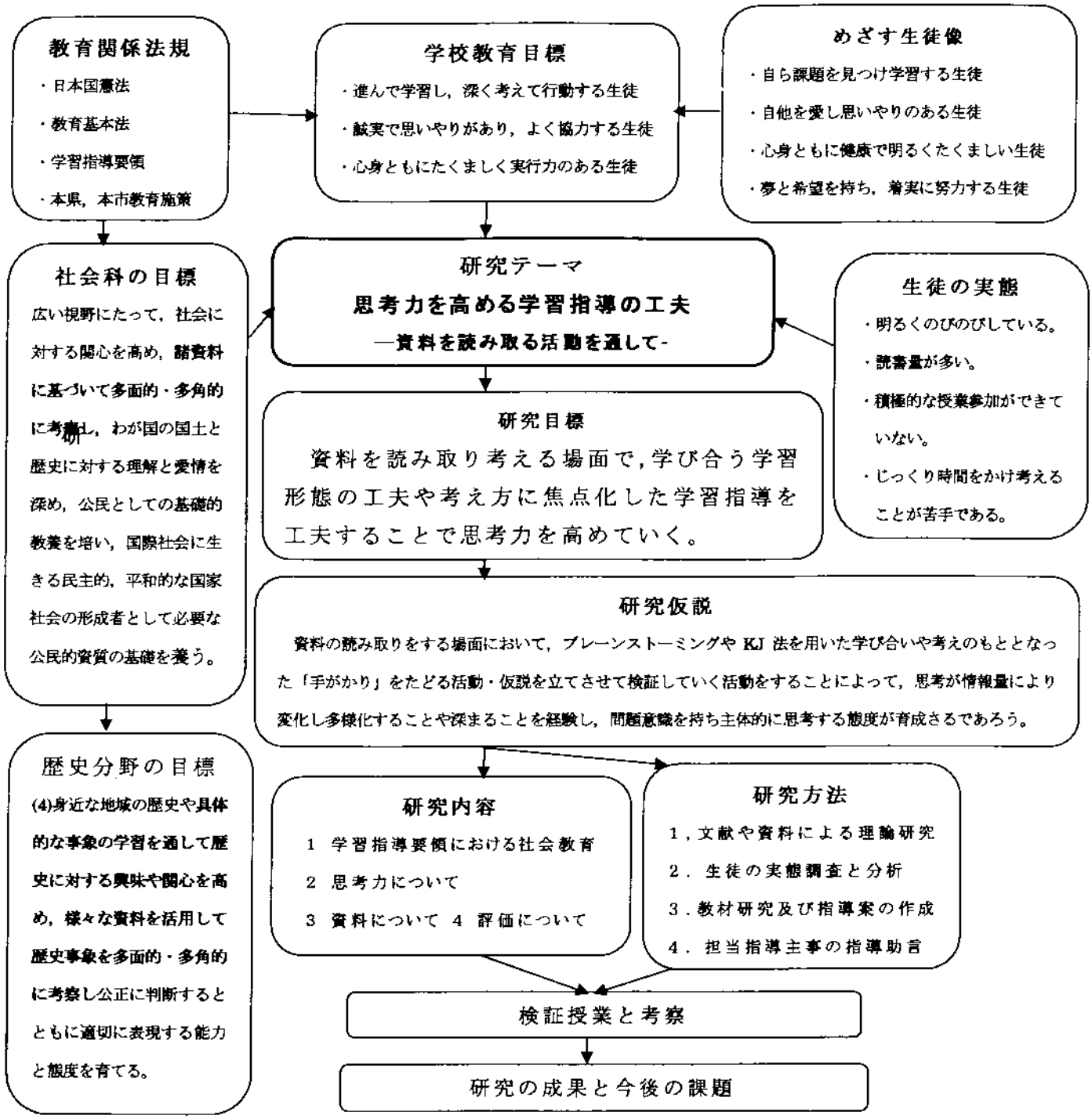
（具体仮説）

1．資料を読み取る場面において，ブレーンストーミングや KJ 法を用いることによって思考が情報量により変化し多様化することや深まることを知り意欲的に資料に向き合う姿勢が育つであろう。

2．思考の「手がかり」をたどる学習活動において，自分の考えと他者の考えを色分けし，提示することによって，学び合うことの意義を知り，自分の意見を述べる姿勢や他人の立場や意見を認め尊重する社会的な見方や考え方が育成されるであろう。

3．資料を読み取る場面において，子ども自身が仮説を立てその検証をすることによって主体的に思考を働かせて学習する態度が育つであろう。

Ⅳ．研究の全体構想図



Ⅴ．研究内容

1　新学習指導要領における考え方（多面的・多角的な思考）

本研究の「考える力」と「資料を読み取る力」について新学習指導要領との関連をまず考えていくこととする。新学習指導要領では，子どもが自ら学び，自ら考える力を育成することが目標のひとつとしてある。それを受けて社会科においても次のように各分野で目標が設定されている。

○全体目標　「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」
○地理的分野「様々な資料を適切に選択，活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断させるとともに」
○歴史的分野「様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断させるとともに」
○公民的分野「様々な資料を適切に収集，選択して多面的・多角的に考察し事実を正確にとらえ，公正に判断させるとともに」

以上のように資料に関しては「諸資料」ないし「さまざまな資料」という記述が思考力に関しては「適正に選択，収集，活用」して「多面的・多角的に考察する」という記述がある。

2　「多面的・多角的」の意味

「思考力」を考えるにあたって，猪瀬武則[1]氏による「多面的・多角的」の定義を参考にまとめていくことにする。多面的とは，社会事象そのものが様々な側面を持っているということで，いわば，多様である社会事象を認識させることがねらいとなっている。これは，「内容」の側面を示している。一方，多角的とは，社会事象をみる主体の視点をさしている。したがって「多角的にみる」とは，認識・思考・判断の主体がさまざまな視点を持っているということになり，多様なアプローチで問題に肉薄する，思いが表明されている。これは，「方法」の側面を示している。

3　社会科学習と資料

次に社会科学習における資料について考えていくこととする。社会科学習と資料に関して福島茂明[2]は次のように説明している。学習において，そのねらいを的確に，そして効果的に達成するために必要なものが資料である。特に社会においては，資料は学習の中核に位置付けられるものである。社会科は，一人ひとりの子どもが，自分なりの目で社会事象を観察することから学習が始まるといわれている。子どもたちが観察する社会事象が，教科書や資料集などの資料なのである。この資料への主体的な取り組みから一人一人の子どもの多面的･多角的な思考が育てられるのであり，それが社会科のめざすところである。

従来，教科書や資料集などの資料は，教科書の記述の確認や興味関心を引くために授業の導入に触れられることが傾向としてみられた。これからは，資料を活用し多面的・多角的に切り込み，立体的に時代背景や当時の生活様式・思想など切実感を持たせて捉えさせたい。

(1)教材と資料

「教材は，諸々の社会事象や事実あるいは文化遺産などを，子どもに受け継がせたり創造的に発展させたりするために組みかえたものである。それらを組みかえるとき，社会が求

める子ども像と子どもの発達の特性とをうまく絡ませながら，子どもが学習すべき内容のつながりや広がりを見通したものである。そしてこの教材を，子どもたちに指導する教師が噛みくだいていく過程に，資料が具体的に選択され位置づけられてくるのである。」

(2)資料と社会的判断力

社会科学習の中心的ねらいの一つに社会的判断力の育成がある。社会的判断力は，一人びとりの子どもが社会的事象に立ち向かうとき「このことについては，これこれの社会的事象からこのことがいえる」という事実判断にまず裏づけされる。そしてその上に「このような社会的事象については，そのあるべき姿としてこうでなければならないと考える。」という社会的事象や社会生活についてのあるべき姿を，その子どもなりに描く価値判断が働いてこそ成り立つものであり，この判断のもとになるのが資料である。

以上のようにみていくと，社会科の学習において，教科目標を達成するために，また，思考力を高めていくために資料の重要性とそれを活用することの意義が十分に理解される。

4　集団における思考力の指導

(1)思考と集団

子ども同士の学び合い集団思考について広岡亮蔵[3]は，次のように述べている。

①思考の集団力学

一人の人間の思考は，意外にも狭く一面的である。したがって多くのゆがみを持つことを免れない。また，人間は，自分が思考したいと欲する方向に考えがちである。そこで，一人の人間が持つ浅さ，狭さ，ゆがんだ思考を，深さと広さと正しさを持つ思考へと高めるための手近な方法は，人間が寄り集まって考え合うことであり，集団で思考することである。集団で思考すると相互誘発，相互葛藤，相互補足などの集団力学の作用が働いて，個々人の思考が誘発され，鍛えられ，より整ったものになっていくからである。これが「思考の集団力学」といわれるものである。

②思考は対話である

思考は，基本的に対話であると言われる。私が思考するときに私の頭の中で，実は二人の私が対話しているのである。問いを発する私と答える私の二人の私が向かい合って対話しているのが思考である。複雑な思考になると何人もの私が登場し，複雑な対話場面を繰り広げているのである。これを「内言対話」という。思考するときにこの「内言対話」が活発に行われることが望ましい状態であるといえる。しかし，子どもにとっては，この「内言対話」による個人思考には限界が時として存在する。豊かな思考，練りの利いた思考，そして確かな思考を子どもに形成しようと思えば，現実の集団の中で，子どもたちが互いに思いを出し合い，意見を葛藤させ，考えを葛藤させ，考えを補い合っていく手立てをとるほうがよい。

(2)　集団思考の条件

①集団の社会的雰囲気

集団学習において，学習者に優れた思考を成り立たせるための条件として，第一に，集団が持つべき“社会雰囲気”が問題となる。許容的な集団雰囲気であることが，豊かで粘

り強い思考の成立のためにはどうしても必要である。許容的な集団雰囲気づくりのためにブレーンストーミングを心がけたい。

ブレーンストーミング

①出てきたアイデアについて批判しない。

②常識に縛られない自由奔放なアイデアを求める。奇抜，滑稽なものを大歓迎する。

③質より量。アイデアの良し悪しは気にせず，どんどん出す。

④悪乗り大歓迎　　（『発想術 101 の法則』P147 高橋浩）

②個人の思考と集団の思考を練り合わせ（ＫＪ法について）

社会科の目標である「諸資料に基づき多面的・多角的に考察し，公正に判断する」能力を身につける手法としては，解決すべき課題を定め，資料を収集し，観察したり，判断したり，構成するＫＪ法が有効であるとされている。また，この手法は，個人の思考とグループの思考を絡み合わせる集団思考の考え方からも理にかなっているといえる。

ＫＪ法

①テーマについて思いついた事をカードに書き出す。　（１つの事だけを１枚のカードに書く）

②カードを分類する。親近感をおぼえるグループを集める。そのグループの内容にふさわしい“表札”をつける。

③“表札”をつけられた事項をどんな順序で説明すれば，内容を正しく把握し，意味づけができるかを考える。　　（『社会科教育指導用語辞典』教育出版）

5　思考のメカニズムを探る

授業で子どもたちに考える授業を体験させたいという思いから，思考力を育成し高める授業の工夫は何かないかと考えた。そこで，子どもたちは，何を手がかりとしてどのように考えを広げていくのかという子どもたちの「考え方」を分析すれば，考えさせる授業を進める上で何かヒントをもらえるかもしれない。また，子ども自身で考え方の「手がかり」をたどることで情報量による思考の変化や資料を読み取ることの大切さ，既有知識の必要性など多くのことを学ぶものと考える。考え方の「手がかり」探る方法として，静岡大学教育学部附属島田中学校の取り組みを参考にわかり方の追求を試みることとする。

(1)考え方の「手がかり」とは

「考え方」を追究していくにあたり「手がかり」を次のように規定した。

授業中，生徒が自己の外部より得る情報や，授業以前に自己のうちに既に持っている知識技能・情操で，生徒が考えるときに使う総称である。

そして，これらの「手がかり」を「外在的手がかり」と「内在的手がかり」の２つに大きく分類する。

「外在的手がかり」

資料，図，VTRの映像，教師の説明・指示，板書や他者の意見など等から引き出される「手がかり」であり，これらは，本時の授業の中で，自己の外部より情報として引き出されるものである。

「内在的手がかり」

過去の中で獲得した既習事項，本やテレビなどから得た知識，あるいは生活体験などから引き出される「手がかり」であり，これらは生徒が本時の授業以前に自己の内部に持っているものである。

(2)「手がかり」をもとにした指導の留意点。

生徒が自分の考えを深めていくためには，解決に必要な「外在的手がかり」と「内在的手がかり」の両者を引き出せるとともにそれぞれの「手がかり」の関連付けを活発に行わせることが大切になる。

(a)生徒が引き出すと思われる「情報の手がかり」をできる限り予想し，資料の内容及び提示の仕方を工夫する。

(b)解決に必要な「内在的手がかり」となる知識や技能などを，どこで身につけさせておくか，単元を通した教材構成をする。

6　仮説（～だはず）について

「覚える社会科」から「考える社会科」をめざして，いろいろな取り組みを行ってみていくなかで，子どもたちがスムーズに思考を働かせるようにするには，どのような授業展開をすればよいのかということを考えていくようになった。指導法には，課題解決的な学習や「ゆさぶり」のある授業など多くの授業形態があり，どれも成果を挙げている。しかし，私自身としては，子どもの実態や反応をみると授業を展開するなかで不自然さや違和感を少し抱いていた。

例えば，資料を読み取らせる場面で考えてみると，課題解決的な学習や「ゆさぶり」のある授業では，教師側が意図するある意味，仕組まれた課題や答えがあり，子どもの資料からの読み取りの内容には正解や不正解が出てくることである。想定外の気づきや指摘は，認めはするが歓迎されず，また，授業展開にはあまり生かされないということもありえるからである。

そこで，子どものどんな気づきも取り上げ，なおかつ子ども自身が主体的に学習していく手立てを探ることとなった。その一つの手法として資料の読み取りの場面では，子ども自身に仮説(～だはず)を立てさせることにしてみた。それは，子どもにとって資料からいきなり課題を設定することは，困難なことであり，また，不自然に思えたからである。日常の会話の中でも何か外国の国の写真でもあれば，通常は，写真を見て「これは韓国だはず」とまず仮説を立て，それに対して民族衣装だとかハングル文字だとか理由付けをしていく順番をたどることが多いからである。このように子ども自身が仮説を立てていく手法をとると思考が自然に働くことはもとより，仮説自体には正解も不正解も存在せずどの考え方も受け入れられていくこととなる。また，この仮説を検証していく過程では，主体的な学習が行われ，そのことで多くのことを学びとるものと考える。

Ⅵ　授業実践

1.大項目　　第６章　現代の日本と世界

2中項目　　第１節　　「第一次世界大戦」

3中項目の目標

第一次世界大戦前後の国際情勢のあらましを理解させるとともに，民族運動の高まり，国際平和への努力，この時期のわが国の国民の政治的自覚の高まりに気づかせる。

4単元について

(1)教材観

この単元「第一次世界大戦」の時期は，それまでのゆっくりと変化した時代とは異なりあらゆるものが変化した大転換期であるといえる。今日の国際社会で大きな発言力や影響力を持つようになったアメリカが国際的地位を高めたのも，ロシアで革命により社会主義国のソビエト社会主義共和国が誕生したのも第一次世界大戦の影響が大きい。また，民族運動にしても帝国主義の支配下にあった国々で民族高揚の動きがみられたのもこの大戦後に世界的に起こっている。このほかにも民主主義の進展など今日の社会に見られる基本的な特徴の多くが第一次世界大戦を出発点にし，これらの要素が複雑に絡みあって展開されているといえる。

内容の取り扱い方として，指導要領によると「『第一次世界大戦前後の国際情勢のあらまし』については，大戦の景気，日本の参戦，ロシア革命，戦後の国際協調の動きを通して世界の動きとわが国との関連を重点的に捉えさせるようする。また，『わが国の国民の政治的自覚の高まり』については，民主主義思想の普及を背景として本格的な政党内閣による政党政治が展開したこと，普通選挙が実現したこと，米騒動などを契機に労働運動，農民運動，社会主義運動，女性の社会的進出などが幅広く行われるようになったことを気づかせるようにする。」とありその際，詳細な経緯は取り扱わないとしている。

以上のようにみていくとこの単元「第一次世界大戦」は，その名にあるように世界中に大きな影響を与え，この時期の世界的な社会制度の変化や民衆の運動などを知る重要性な単元であると気付くとともに現在の世界情勢や国内の社会現象などを考えていく上において大切なメッセージやヒントを与えてくれるものと考える。

(2)生徒観

子どもたちのこの時期に関する感じ方について考えていくと，この単元「第一次世界大戦」の時期は，20世紀の前半にあたり子どもたちの祖母や祖父は幼少期であるなど，これまでの歴史の授業より少し身近に感じられるところである。また，この時期の世界的な変化に大きな影響を与えた戦争に関しては，平和学習などで馴染んでいて，残酷で熾烈を極めた先の沖縄戦のイメージが強いために惨状の様子や国民の感情などは比較的他の社会事象より理解しやすいように思われる。

資料を読み取り，考えていくことに関しては，発表形式より記述式に変えた影響なのか少しずつではあるが命題化できてきている。しかし，他人の意見にすぐ間違いを指摘するなど他者の意見を許容する段階にはまだ到達していない子どもも数人いたり，グループで学びあう場面で充分意見交換できないなど基本的な集団での学習活動ができない子どももいて，継続的な取り組みや工夫の必要性を感じるところである。

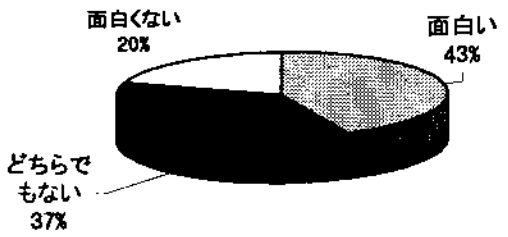


図１「社会の授業は面白いですか」

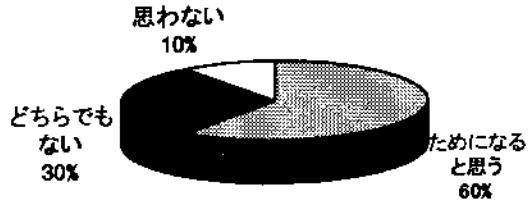


図２「友達と意見を出し合ったり質問し合うこと」

上のグラフは，質問紙法により子どもの社会の授業に関する意識や意見を出し合う授業に対する考えをたずねたものである。図１の「社会の授業は面白いですか」という問いに対して４３％の子どもが「面白い」と解答し，20％の子どもが「面白くない」と解答している。「面白くない」の 20％と「どちらでもない」の 37％を加えると半数以上の子どもたちが積極的に授業に対して学びの面白さを実感していないことがうかがえる。図２の「友だちと意見を出し合ったり質問し合うこと」についてのアンケートには，60％の子どもがその価値を感じている。理由の記述には「自分で考えなかった意見が聞ける」 自分だけの意見だけでは変わらないけど友だちの意見などを聞くと考えが変わったりする。」などと書いている。以上のことから，考えることや意見を出し合うことを意味のあることと感じながらも授業に面白みを感じず敬遠しがちな状況があり，もったいない結果となっている。子どもを授業に引きつけながら思考力を高めていく指導法の工夫が求められている。

(3)指導観

子どもにどのような力を育成するかということに関して学習指導要領に「自ら学び自ら考える力の育成を図る」社会科の目標に「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」とある。そこで，この単元においても，必要に応じて資料を活用し，子ども自ら考えさせ，その意見を出し合う学びの場面を作ることで多角的・多面的な思考を高めていきたい。この単元では，学ぶべき項目も戦争に関連したことから，民族運動，国内においては米騒動から政党政治まで幅広い。そのため，どうしても広く浅い学習に陥りやすい。そこで，資料を読み取る時間の確保と思考を深める観点から内容を精選して取り組むものとする。

５指導計画および評価計画(全７時間)　　は本時の内容です。

時数	学習項目	ねらい
1 2 3	総力戦の衝撃	○「第一次世界大戦」の資料から多くの事実（命題）を多く見つけ出し，深く広く読み取り多面的・多角的な視点で仮説を立てることができる。 ○第一次世界大戦の原因が，帝国主義諸国間の植民地や勢力範囲をめぐる対立にあったことを具体的に理解させる。 ○この戦争は，史上初の世界的な規模の戦争であり，多くの犠牲者も出たため，戦争に反対する勢力も強まり，ロシア革命が起こったことに気づかせる

4	連合国の一員として	○日本は中国での勢力を拡大することをねらって大戦に参加し，二十一か条の要求を中国につきつけ，さらに，ロシア革命を抑えるためにシベリアに出兵したことを理解さる。 ○大戦中に，日本の資本主義が急速に発展したことに気づかせ，大戦景気と米騒動について考えさせる。
5	不戦の誓い	○連合国の反撃やドイツの革命で,大戦が終結したことや，その後つくられたベルサイユ体制は戦勝国の利害の上に成り立っていたことを理解させる。 ○大戦後作られた国際連盟などの意義やその限界などを考えさせる。
6	わきあがる独立マンセーの声	○大戦中から民族的自覚を強めたアジアの諸民族が民族自決を要求して戦った様子を。朝鮮・中国・インドの側から具体的に捉えさせる。
7	大正デモクラシー	○大戦後，日本でも民主主義を求める運動が盛んになっていったことを理解させる。 ○民衆運動によって，本格的な政党内閣が出現し，普通選挙制が実現する一方で，政府は治安維持法によって運動を抑圧したことを理解させる。

6 本時の学習

(1)単元名「第一次世界大戦」

(2)本時のねらい

・「第一次世界大戦」の資料から多くの事実（命題）を多く見つけ出し，深く広く読み取ることができる。

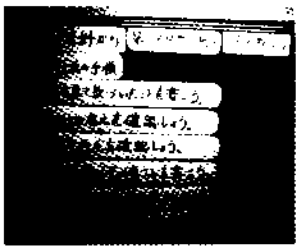
・相互に考え方を述べ，多面的・多角的な見方や考え方を広げ，仮説をたてることができる。

(3)授業仮説

・資料を読み解く場面において，ブレンストーミングやKJ法により自分の考えを持ったり他者の考え方に触れることによって多面的・多角的な見方や考え方ができるようになるであろう。

・第一次世界大戦の授業において，資料を深く読み取った情報をもとに仮説を立てることによって，主体的に思考を働かせて学習に取り組むことができるであろう。

(4)本時の展開

主な学習活動と子どもの反応	教師の支援	学習形態
1 教科書 P174 の『イギリスの軍需工場』を見て気がつくことや疑問に思ったことを紙に書いてください。 ① 『イギリスの軍需工場』の資料を見ながら，各自で書いていく。	KJ 法① ブレーンストーミング②③④  ○個人的な感想なので間違いのないことを伝え，気軽に考えさせる。	個人

生徒の予想意見 ○女性しかいない。→女性差別 ○同じものを大量に作っている。 ○工場が広い	○考えさせる時間をできる限り子どもに合わせる。	個人
2 各グループで気づいたことを出し合いグループ分けし「表札」を付ける。	KJ法② ブレーンストーミング①	
②グループで仲間分けの相談しながら決めていく。 ○相互に自分の考えを述べ合う。	○思考を多面的・多角的に広げていく。 ○相互に「出てきた考え」をどこに着目したかを確認していく。 ○新たに気づいたことがあれば追加しても良いこととする。	集団
3 クラスで考えを確認しよう。		
③グループに拘らず学級全体で思考を深めたり，広げたりする。	○子どもたちと共に資料の読み込みを行い深く広く視点を広げていく。	
4 印象に残ったことを書こう。		
④これは，良いと思うことを書きていく。生徒の予想意見 ○爆弾のような危険な物を作っている。 ○どんな気持ちで造っているか ○男の人が注意するのは女性ではなく動作かもしれない。	○板書や会話の中からも自分にとって大事だと思うものを書かせる。 ○机間指導で，子どもたちの思考の状態に応じて支援する。	個人
5 自分なりに考えをまとめる。～だはず		個人
⑤自分なりにまとめていく。 生徒の予想意見 ○イギリスは，人口が少なかったはずだ。 ○生活用品は，不足したはずだ。 ○みんな戦争に協力したはずだ。	○各自に追求する仮説を立てさせる。 ○個人的な感想なので間違いはないことを伝え，気軽に考えさせる。 ○何人かに発表してもらう。	
6（なんで）理由を考えてみましょう。		個人
⑥仮説を考えた理由を書き出す。	○仮説を考えた基となった考えを書き出させる。	集団
生徒の予想意見 ○生活用品は，不足したはずだ。 戦争で使うものを多く作っていそうだから。 ○みんな戦争をやめたいはずだ。 爆弾の量を見て，多くの人が死んだと予想されるから	○何人かに発表してもらう。	

(5)本時の配布資料①　読み取る資料（第一次世界大戦中のイギリスの工場）と授業の手順の説明

第一次世界大戦中のイギリスの工場

今日の授業の手順

①写真の資料を見て気づいたことを書き出していこう。
（写真で気づいたところに印をしてから短冊一枚に一つ気づいたことを書いていく。）

②次にグループでお互いの考えを確認していこう。
（各自で考えたことを発表して，その内容によりグループ分けをしていく。）

③クラスで，いろいろな考えを出し合って，写真について深く知っていこう。
（グループ単位で発表してもらい，深めていく。）

④これは良いと思う意見をワークシートに書いていこう。

⑤自分なりに考えをまとめてみよう　（～だはず。）

⑥（なんで）⑤のように考えたのか。

本時の配布資料②　生徒のワークシート

資料から考えよう

1月29日(木)曜日　2年2組　番(　　)

単元名（第一次世界大戦　）

印象に残ったことを書こう

○えらそうな人がかんししている。
○女の人がたくさんはたらいている
○ゆかに何かおちている。
○エプロンみたいなの着ている。
○工場が広い。

資料から情報を得る

～だはず

男の人が強くて，女の人は，あんまり，意見とかかいえない時代!?　だはず

仮説を立てていく

なんで ➡

女の人ばかり，はたらいている　●から

仮説の理由づけ

どうだった ➡

たくさんはぐだんを作っているよう　だった

成果と課題

自己評価　当てはまるところに○をつけてください。

○資料から気づく事や疑問点などを書き出すことができたか。

よくできた　できた　少しできた　出来なかった

○友達の意見や先生の話から考え方を広めることが出来たか。

よくできた　できた　少しできた　出来なかった

感想を書いて下さい。第一次世界大戦中の時代について，資料や，人の意見をみたりして，考えることができた♪

自己評価と感想

(6)授業での子どもたちの様子　（今日の授業の手順に沿って）

①写真の資料を見て気づいたことを書き出していこう。

（写真で気づいたところに印をしてから短冊一枚に一つ気づいたことを書いていく。）

短冊に書いている様子①

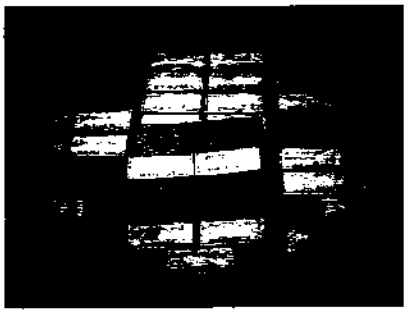
短冊に書いている様子②

②次にグループでお互いの考えを確認していこう。

（各自で考えたことを発表して，その内容によりグループわけをしていく。）

グループ分けの様子

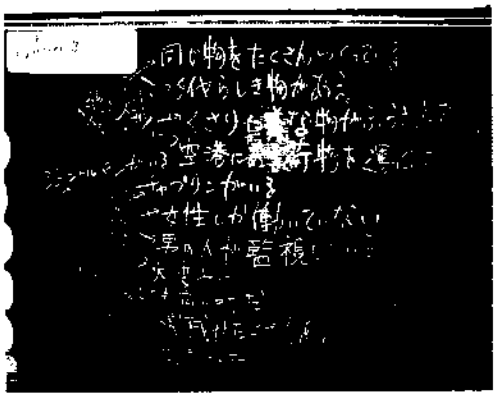
グループ活動の支援の様子



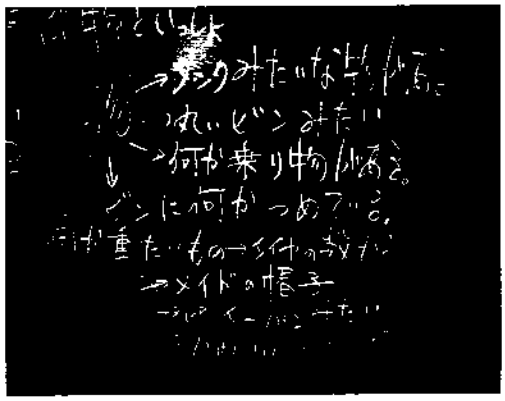
グループ分けされた資料例

③クラスで，いろいろな考えを出し合って，写真について深く知っていこう。

（グループ単位で発表してもらい，深めていく。）

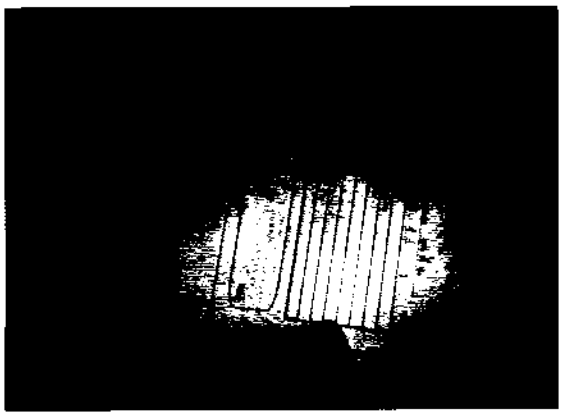


資料読み込みを支援した板書①



資料読み込みを支援した板書②

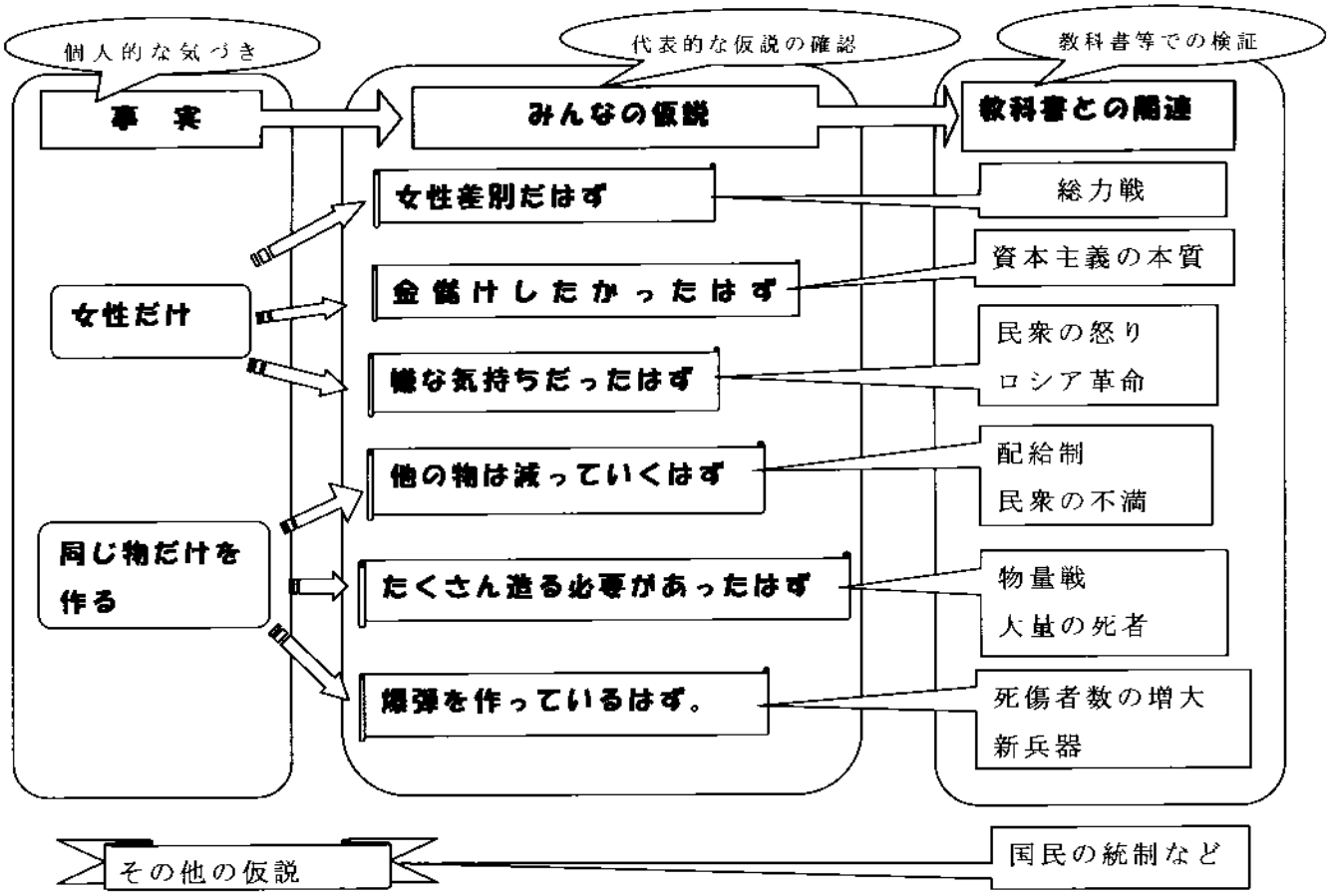
④これは良いと思う意見をワークシートに書いていこう。
⑤自分なりに考えをまとめてみよう　（～だはず。）
⑥（なんで）⑤のように考えたのか。



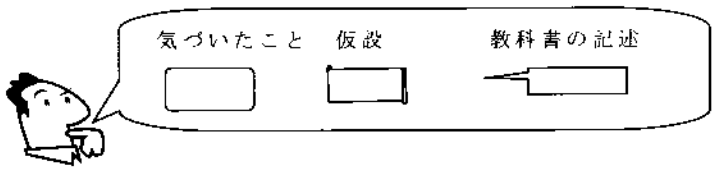
考え方の手順④～⑥の活動例１

考え方の手順④～⑥の活動例２

（７）仮説を立てて学習する流れ



○生活が苦しい時代だはず。
○上下関係が厳しい時代だはず。
○機械化が進んだ時代だはず。
○みんなが嫌がった時代だはず。



(8)評価

○「第一次世界大戦」の資料から多くの事実（命題）を多く見つけ出すことができたか。

○相互に考え方を述べ，多面的・多角的な見方や考え方を広げ，仮説を設定することができたか。

7 検証授業反省会

【所長】これまでの中学校の授業では，一方的な教え込みが多かった。前先生の授業を機に指導法改善に努めて欲しい。新しい試みをこれからも広げていけるように希望したい。

【校長】授業の工夫を求める声が子どものなかからでていることなどから，これを機に学校全体としても興味関心がわく授業作りをめざして次年度から改善点として取り組んでいきたい。

【授業者反省】

○検証授業では，たくさん取り組みや授業展開など試みたいものがあったが思うようにできなかった。日ごろの授業がいかに大切か改めて気づかされた。

○時間に余裕があっても熱心にやってくれて嬉しく思えた。

○資料から広く深く読み取る手法を試みた。

○事前に他の単元で2時間ほど同じ形態で授業をしていたためかうまく命題化していた。

○問題解決よりは仮説→検証のほうが次への課題へとつながると思い設定した。

○いろいろな研究をしてみたかったが，思考力を育てるために，「毎時間できることは」，「研究後も生かせる方法は」と探っていくと，子ども自身で仮設をたてて教科書を使って検証（追及）するやり方が良いだろうと考えた。

【授業参観者の感想】

○資料を読み取る授業は子どものくいつきがよい。

○練りあいの場面で，もっと子どもに言わせても良かったのではないか。

○写真が鮮明であればもう少し細部まで見えて発言引き出せたのではないか。

○授業の作り方としては，「気づいたことを書き出してください。」というよりは，「五つ以上出してください」などハードルを高くしたほうが良い。また，ほめ方ももっとオーバーにする方が子どもたちは喜ぶのではないか。

【質疑応答】

Q仮設を立てさせた理由

「～だはず」にしたのは，強く疑問を持たせるための配慮。仮説は，強い疑問意識を持たせることと考えている。教師の方で研究を行う際には，授業仮説や研究仮説をたてて追及し解明するという手順から成果や課題を出す。このように，子どもたちにも仮説を持たせることで，授業のなかでの説明や友達の意見・教科書や資料集を扱う際に集中して追及する態度が育ち，仮説の解明のために取り組むと考えるからである。

Q仮設をどう検証させていくのか。

子どもの立てる仮説は，一人ひとり異なるので，授業の中で個別に検証することは難

しいため，代表的な仮説をいくつか取り上げ検証していくことにする。仮説と検証のやり方を経験させることで，次々と仮説をつくりだし検証していくように進めていきたい。

Q子どもたちの実態

第一次世界大戦に対する子どもの意識としては，第二次世界大戦と比較してあまり強くないように見受けられる。また，写真などの資料からの読み取る技量については1学期に少し行っていたが，一部の生徒の発言にとどまっていて高いとは言えない状況であった。

Q写真を選択した理由

この写真は，一枚で総力戦の状況や大量に爆弾が使用される近代戦の特徴を示すなど多くの内容が読み取れ，第一次世界大戦の当時の様子をよく表していると感じたからである。

【指導助言】

◆資料を読み取る授業について

社会の授業と普段の生活はかけ離れていて，子どもたちは，社会の構造にあまり興味がない。大戦前の世界情勢や発端を構造的に学ぶ従来の方法ではなく，子どもの視点を持たせて考えさせたい。そこで，資料を読み取る方法で，子どもたちの関心を引き寄せ，関心を高めていくことにする。「服装がかわいい」「エプロンを着ている」「ゴミが落ちている」など，どのような意見でも授業につなげていける。事実を読み取っていくと課題より先に仮説を立て始める。疑問や課題を先にするとハードルが高くなる。一人ひとりの仮説となるので中には，社会科の本質に迫れないものが出てくるが，その後の授業のなかで検証の場ができる。この繰り返しで社会的事象に関心を持つ子が育つであろう。

このような取り組みは評価したい。

◆資料について

写真資料1枚にすることで深く読み取ることができる。2枚の資料になると対比することになり子どもたちの関心が違ってくる。2枚だと論理的構造の読み取りになる。1枚だと「その時代とは」という1つのことに集中できるので，この選択は，今回の資料を読み解く力を高めたいという主旨からすればよかったのではないか。

◆感想

○どの子どもも表情が豊かで楽しそうであった。

○作業学習の形態となりほとんどの子どもが授業に参加することができていたし，子どもの感想のなかにも「こんな授業をまた受けてみたい」という意見がでていた。

○写真の中に出ている英語で書かれた物を見つけてスペルは何だろうと辞典で調べる子どももいるなど主体的に取り組む姿勢が見られた。

○グループでの意見を全体に広げる場面では，一巡目は意見を多く出させること。2巡目から広く意見を求めるような授業展開にすれば，もう少し多くの意見が出てきたて広がりや深まりが期待できたのではないか。

8 仮説の検証

具体仮説1の検証

1. 資料を読み取る場面において，ブレーンストーミングやKJ法を用いることによって思考が情報量により変化し多様化することや深まることを知り意欲的に資料に向き合う姿勢が育つであろう。

(1)アンケート結果から

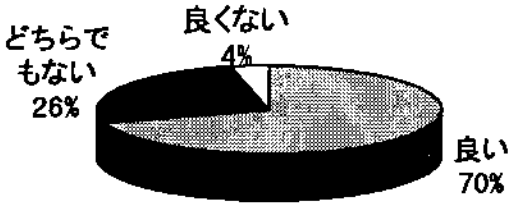


図 3「資料やグラフを活用すること」

表 1 生徒の感想

最初は全然意味わからなくてどんなのをやるのかわからなかったけど，皆といっしょにやっていくにつれておもしろくなってきた。自分で資料をみて考えることもできたし，友達の考えていることや思っていることを知ることとかできたのでよかった。前までは資料を見てノートに書くことで，文章もよんで書いてしまいけど，写真をみるだけでいろんなことを，気づくことができるようになった。友達のと自分のをあわせて種類ごとにわけたりするのも楽しかった。

図3は，「資料やグラフを活用すること」についての結果である。「良い」が70%，「良くない」が4%，「どちらでもない」が26%となっている。「良い」とする理由としては，「脳が活発に働いている気がする。」「グラフや表だけでこの時代を考えることができるようになるから」などであり，「良くない」とする理由としては，「先生の説明を中心とした授業がやりやすい」「資料を見て考えるのは疲れるから」などである。

(2)生徒の主な感想から

表1は，資料の個人による読み取りと学び合いについての生徒の感想である。次第に思考することの面白さや学び合いを評価していること。また，資料を読み取る力がつき，意欲的に資料に取り組めるように変容した生徒の様子がみえる。その他の意見も参考に掲載する。

○このやり方だと暇を持て余すことなく授業に集中できるのでいいと思う。また，考えも深まって覚えるときも覚えやすい。

○以前の授業は，資料を見るだけだったけど今の授業は，グループになって自分の意見を紙に書いて出し合い，画用紙に貼って発表していくものなのでみんなの意見も分かってよい。

○この方法は，考えたことや思ったことを知ることが出来るし，こういう自由な授業をこれからも続けて欲しい。

○資料を見て考えたりってあまりやらないことなので，いつもと違い楽しかった。それに，みんなが何を思っているかも発表できるし，自分と同じ考えの人はどれだけいるかも分かった。

○資料を見て，いろいろ考えることが出来たし，一人一人考え方などが違っていていろいろな意見が出たから良かった。

(3)仮説1の検証

ブレーンストーミングやKJ法を用いたことで，子どもたちは，気兼ねなくお互いの意見を出し合い学び合いの経験を積むことが出来たと考える。また，共通の資料を扱うことで共感を持ち他者の意見を受け入れることができた。しかし，3 割の生徒は，資料やグラフを活用した授業に対して良い評価を与えていない。資料の精選や発問の工夫などにより気づく楽しさや伝える

喜び，共に考えだす嬉しさなどを体感させ，意欲的に考えようとする姿勢を育てていきたい。

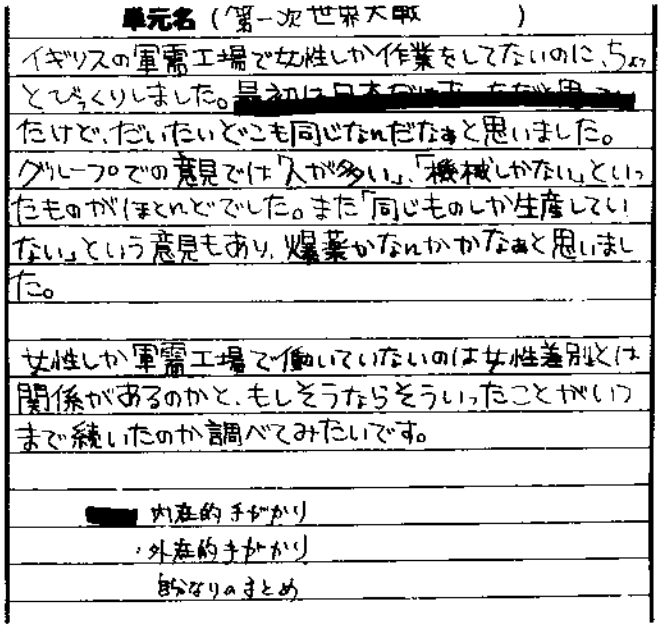
具体仮説２の検証

> 2．思考の「手がかり」をたどる学習活動において，自分の考えと他者の考えを色分けし，提示することによって，学び合うことの意義を知り，自分の意見を述べる姿勢や他人の立場や意見を認め尊重する社会的な見方や考え方が育成されるであろう。

(1) 手がかりを探る資料

生徒に対して，学び合うことや資料を深く読み取ることの意義を視覚的に理解させるために色別で確認させた例である。
「内在的手がかり」はピンク色。「外在的手がかり」は緑色。まとめや疑問や課題的なものを青色。以上の色で表示した。表2は，授業後に思考の過程を記述させたものである。課題としては，教師による「内在的手がかり」・「外在的手がかり」の判別が困難な場合がある。
また，文章表現の苦手な子への指導が必要となることなどである。

表 2　生徒の感想



単元名（第一次世界大戦　　）

イギリスの軍需工場で女性しか作業をしてないのに，ちょっとびっくりしました。最初は日本でも[redacted]たけど，だいたいどこも同じなんだなぁと思いました。グループでの意見では「人が多い」，「機械しかない」といったものがほとんどでした。また「同じものしか生産していない」という意見もあり，爆薬かなんかかなぁと思いました。

女性しか軍需工場で働いていないのは女性差別とは関係があるのかと，もしそうならそういったことがいつまで続いたのか調べてみたいです。

[redacted] 内在的手がかり
・外在的手がかり
◎なりのまとめ

(2) 生徒の主な感想から

表2は，「第一次世界大戦」について考えていったことを生徒に順序だてて書かせたものである。この生徒は，思考の過程を書いていくなで自分の考えが変化していく様子を知ることができた。色分けのものを見て，改めて自分だけの考えでは考えなかったり，思いもしないことが友だちの意見や授業をしたことで考えることができたと感想をだしていた。教師の側としてその生徒の既有知識や思考の過程が分かるだけでなく，この世代の考え方が分かり，授業での説明の際に数人の生徒の考えを提示するなど活用できるものが多い。

○自分の意見と他人の意見を気にすることがなかった。この色分けを見ると，友だちの意見を結構自分の考えと一緒にしている。友だちの意見を聞くのは大切だと思った。

○私は，あまり資料や教科書を見ても考えない方なので，人の意見を聞くとなるほどと思ったり，資料の見方が分かったりする。こうして色分けを見ると友だちのおかげで勉強できるところも多いと気づいた。

(3) 仮説2の検証

授業へのかかわり方が色の割合によって一目瞭然に出されるので，確認している方からも思考の変化や高まり深まりが手に取るように見えてくる。自分の考えをしっかり持っている子には，学び合いによる思考の変化や資料の読み込みによる思考の深まりなど多くの気づきや変化が確認されたが，主体的に学習に取り組んでいない子どもや文章表現の苦手な子にとってはあまり効果を認めることができなかった。友だちの例を参考にするなどして学び合いの意味を考えさせていきたい。

具体仮説３の検証

3資料を読み取る場面において，子ども自身が仮説を立てその検証をすることによって主体的に思考を働かせて学習する態度が育つであろう。

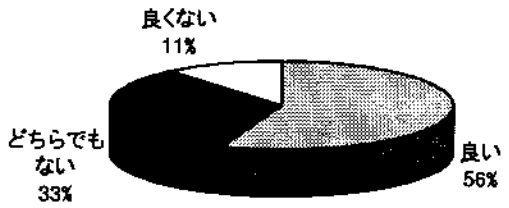


図　４仮説を立てる授業について

表　３　生徒の感想

資料を読みとって、まとめる授業で
第1次世界大戦中の様子についてやりました。
この時代には女性差別が強く、新しい兵器をたくさんつくっていたなどの仮説を立てました。この授業で第1次世界大戦中の様子がどのようなものだったのかが想像できました。
この授業は資料を読みとって仮説を立てるということだったのでスムーズに進めました。
またやってみたいと思いました。

(1)アンケート結果から

図4「仮説を立てる授業について」のアンケートを実施したところ「良い」と歓迎する意見が56%，「良くない」が11%，「どちらでもない」が33%というものである。理由の記述では，次のような結果がでた。良いという意見には，「自分で考えたことなので，いつも以上に詳しく教科書などを見ていこうという気になる」・「自分でいろいろ考えられ，考えも膨らむから」・「自分の考えていることを書けるから」などがあった。また，否定的な意見では，「答えが分からないと意味がない」・「テストで仮説を書いてしまいそう」というものがあり，仮説を検証する支援の大切さと効果を体験させることの大切さを感じる結果となった。表3は，仮設を立てる授業についての生徒の感想である。資料から第一次世界大戦の様子を予想し，仮説を立てる作業が円滑に行われていたことが感想として出てきている。「またやってみたい」と好意的に受けとめていることから主体的な学習もなされているものと考えられる。

(2)生徒の主な感想から

○いろんな仮説が出て，「この戦争はこうだった」・「この時代はこうだった」とみんな資料をずっと見ていたのでいろんな意見が出て良かった。

○仮説を立てるのは簡単なことだが，真実を確かめるのは案外難しい。

(3)仮説3の検証

表3は，授業後の感想である。彼女の仮説は，必ずしも正しいものではなく正解には至らなかった。しかし，この仮説を通してスムーズに思考を働かせることが出来たということに彼女は満足している。授業を通してこのような満足感を子どもに感じさせることも思考力を高めるという観点からいくと大切なことであると思われる。このことから，仮説を立てて授業を子ども自身による主体的に取り組ませることは有効な手法であると言える。また，どの手法を取るにせよ子どもに新しい取り組みを定着させるには，オリエンテーションが非常に大切となることを感じた。

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

1，研究の成果

(1)子どもの思考の過程について文献や先行事例などで学んだことにより，発表しやすい雰囲気づくりや仮説を用いる方法など子どもの目線や立場にたって授業展開を考えていくようになった。

(2)思考力を高める目的で作業的な学習形態を工夫したがそのことで授業に対する子どもの意欲も高まっていくという嬉しい効果も出てきた。

(3)緊張する検証授業やそれに向けての準備など子どもとの取り組みや密接な関わりを通して,お互いを理解しラポートがとれるようになってきた。

(4)アンケートや授業を通しての感想から「自分の意見がいえるから」「自分の考えたことを中心に考えていけるから」などの子どもの声を聞くことができた。このことは，本来子どもたちは主体的に学習したいと考えている現われであると言える。子どもたちは，学びたがっているそう実感することができた。

2，今後の課題

(1)資料の活かし方を含めて資料のもつ価値を充分に引き出す授業展開を考えていきたい。

(2)思考力を高めるということは，これからますます重要なことなると考える。そのために，中学生段階での思考について継続して研究していきたい。

(3)思考する授業に対して否定的な子どもの意見は，定期テストや高校受験に出題される内容でないことを理由として挙げていた。このことから，今後は，学ぶことの大切さや思考することの意義などについても授業の中で取り上げ考えさせていきたい。

3，終わりに

授業のやり方を研究し，子どもに楽しく有意義な授業を受けさせたいという思いから研究所の門をたたきました。今回の研究を通して，研究の進め方やプレゼンテーションの方法・報告書のまとめ方・悩んだ時に役立つ数多くの教育書の存在など多くのことを学ぶことが出来ました。なかでも，私自身の勉強不足を強く感じたことが大きかったように思います。今後，学校現場に戻り,研究成果を活かすことはもとより，忙しい時間のなかでも良いこだわりを持ち子どもの目線に立った授業づくりに励んでいきたいと考えています。

最後に，今回，宜野湾市立教育研究所において学校現場を離れ半年間研究する機会を頂けたことに対して深く感謝いたします。我謝達美校長先生をはじめとする宜野湾中学校の先生方，検証授業の際には大変お世話になりました。温かく歓迎し時には励まして下さった宜野湾市教育長の普天間朝光先生をはじめ，はごろも学習ｾﾝﾀｰの宮城茂雄所長，上原等指導主事，職員の方々大変お世話になりました。多くの指導助言を頂いた中頭教育事務所の吉田直人指導主事，研究員として一緒に机を並べて研究し切磋琢磨した金城雄一先生・金城益美先生・ﾊﾞﾚｯﾄ文野先生など，多くの方々の励ましや支援のお陰で何とか研修を終えることが出来ました。お世話になった多くの方々に心より感謝申し上げます。

〈主な引用文献・参考文献〉

中学校学習指導要領　　平成10年12月

佐伯眞人・大杉昭英・澁澤文隆　共著　『新中学校教育課程講座　社会』ぎょうせい 2000

[1]猪瀬武則　　『社会科教育№470』Ｐ26～27　1999

[2]福島茂明　　『社会科教材研究』　Ｐ10～11　明星大学出版部　1986

[3]広岡亮蔵　　『考える力を育てる』児童心理選集Ｐ208～211　　金子書房